

学	会	の	印	象
---	---	---	---	---

## エクスナー・ロールシャッハ・ワークショップ

■1992.10.23~27. 於小田原・小田原アジアセンター

津川律子 (東京警察病院)

「ロールシャッハ・テストは投影法ではない」という Dr. Exner の自信に満ちた声とともにこのワークショップは始まった。朝の8時30分から講義が開始され、1日中勉強したのち、希望者は夜の12時まで「宿題」ができるという大変に嬉しい？5日間泊り込みの研修会であった。この会がわが国で開催されたこと自体に意義があるろう。

わが国では、ロールシャッハ・テストの施行・分類法として現在ほとんどの臨床家がクロッパ法を修正した片口法を用いている。ところが、米国では Dr. Exner の提唱する「Comprehensive System」が今や主流となってきた。彼のシステム（以下、エクスナー法と略称）は、わが国でも以前から関心を持たれていたのだが、電話帳のように分厚い英文マニュアルの壁に阻まれて普及が遅れていた。最近になって遂に翻訳本が3冊に分けて刊行され、学習の下準備が整ったところで、この会がわが国で初めて開催されたのである。誠に時機を得た催しであり、主催者の中村紀子先生（Exner Japan Associates）に感謝と尊敬の念を供したい。

さて、ワークショップの内容であるが、実際の臨床事例を通してエクスナー法を学ぶという実習と講義が5日間通して行われた。宿題の答え合わせ等の分類法の指導を中村紀子先生が行い、分類終了後の解釈は Dr. Exner が直接行うという作業の繰り返しであった。

Dr. Exner は63歳。鋭い眼に刈り上げの頭、がっちりした大きな体格で、絶え間なく煙草を吸い、タンカレー（ジン）を愛飲する姿からすると、まるで軍隊の教官のように見える。ところが外見とは裏腹に、彼は一流の学者であり、理論的には頑固なプラグマティストとして、多

量のデータに支えられた数値から得られる解釈に重きを置き、象徴的な解釈は好まない。その上で、彼は臨床に直結したロールシャッハ法の構築を目指している。

例えば、エクスナー法では、うつ病指標や自殺指標といった臨床上興味深い値が算出できるし、結果の報告も、「抗うつ剤が効くタイプの単極型うつ病と思われます」とか、「精神療法を行う場合は急に精神内界にふれないように」など、具体的な治療上のアドバイスを忘れない姿勢がある。また、数値だけですべてを判断するのではなく、被検者の反応を何回も反すうしながら、慎重に結論に達する解釈のやり方には安心感をもてた。被検者の反応を吟味もせずに、「精神分裂病得点が高得点だから、この人は精神分裂病です」といった短絡的な結論を出す人では決してない。よって、労を惜しんで楽にロールシャッハの解釈を得ようとする臨床家は、かえって失望したかもしれないと思う。

エクスナー法が日本に根づくには、まだ時間を要するだろうし、健常な日本人データの標準化という大作業も残っている。それに、米国で主流だからといって、慣れ親しんだ片口法を袖にするだけの価値があるのかも未知である。しかし、この会の開催を発端として、この方法で施行・分類・解釈を行う臨床家がわが国でも増えていくことは間違いない。

このワークショップは平成5年秋にアジアセンターで再び開催予定と聞いている。関心のある臨床家は左記の主催者（電話03-5684-3670）へ直接問い合わせ願いたい。

## 第33回日本児童青年精神医学会

■1992.11.4~6. 於横浜・神奈川県立県民ホール

白瀧貞昭 (神戸大学)

第33回日本児童青年精神医学会総会は平成4年11月4, 5, 6日, 横浜において平田一成会長(神奈川県立こども医療センター精神療育部)のもとに開催された。第1日目の夕方には4会場に分かれて, この学会の1つの特徴とも言える「症例検討」が行われた。この症例検討は数年前から始められた試みで, 1つの症例を中心としてじっくりとお互いに討論し, かつ, 日本の最高指導者からコメントを得ながら勉強しようというものである。今回は「青年期境界例」, 「過食症」, 「強迫的不安を示す脳性麻痺児」, 「被虐待児の遊戯療法」の4例が提示され, それぞれ, 西園昌久氏, 小倉清氏, 山崎晃資氏, 斎藤万比古氏が司会とスーパーバイズを行った。例年, このセクションは大変好評で, 本年もその例に漏れなかった。

翌, 5日と6日には会長講演, シンポジウム, 一般演題発表, ポスター発表, 招待講演と盛り沢山の内容があったが, とくに, 今年から招待講演の中に東南アジアとの交流を深める意味から, 近隣の諸国からの招待者が含まれることになった。日本のように社会環境の面でも, 民族的側面から見ても非常にホモジーニアスな国(単一民族国家であるというつもりはないが)での精神医学は, とすれば重箱の隅をつつくような議論に陥りがちであるが, 一歩外に出れば, 最劣悪な子どもの養育環境しか用意されていないところがいくらかでもあり, そこでは子どもの精神発達とその障害といった基本的事項を学ぶ材料がいくらかでもあるのである。日本の児童青年精神医学が学べることがらが決して少な

くないのである。今回は中国, 韓国での児童青年精神医学の現況の一端を聞くことができた。ただ, 同時通訳に時間がかかなり要るなどのために, 議論がほとんど深められずに終了したのは非常に残念であった。

シンポジウムでは「児童虐待」をめぐる問題が取り上げられた。横浜, 大阪での児童虐待の実態とそれに対する対応などを中心に論じられたが, 他の児童精神医学の領域と同じく医者の対応だけではなくともならず, 法律家, 福祉, 教育などとの連携がとりわけ肝要であるとの認識を新たにしたのである。ことの性質上, 対象児は初めから精神科医に持ち込まれることが少なく, むしろ, 小児科医の方が多く扱っているに違いないとの予想はあったが, 他方, 児童相談所で扱うケースは案外, 小児科医が扱っていないケースであったりして, 日本で未だにその実態が把握しがたいのはこの当たりが関係しているのかなどと思った次第。

ほとんどの学会でそうであるように, 本学会でも幾つかのセッションが同時進行するので, 今日では発表演題のすべてを聞ける人が一人も存在しないという皮肉の状況になっている。著者も当然, すべてを直接, 耳にしたわけではないが, 一般演題では比較的, 質問も少なく, 発表者がいささか拍子抜けしたのではないかと思われるセッションが多かったように思う。議論しやすい会場の広さと参加者の数などを知ったうえで, それに向かう努力を近い将来, 真剣にせねばならなくなっているのかも知れない。

## 第2回乳幼児医学・心理学研究会

■1992.11.7. 於横浜・横浜ラポール

小林隆児 (大分大学教育学部)

精神障害のなかでもとりわけ重症に属する精

神分裂病や境界例などの発症の起源が乳幼児期

早期に求められているのは今や共通理解となっている。しかし、その実態については不明な点が多く、直接乳幼児期の子どもたちを治療ないし研究の対象とすることによって、そうした限界を乗り越えようとする努力が近年急速になされるようになってきた。

もともと児童精神医学、小児医学、発達心理学、発達臨床などの諸分野で直接乳幼児を対象とした臨床活動を行っている仲間同士が声を掛け合って自発的に集まって一昨年結成されたのが本研究会である。こうした経緯によって生まれた会であるので会員の構成は極めて学際的である。

前は名古屋市、今回は横浜市（会長：東海大学精神科：林雅次氏）で、日本児童青年精神医学会の翌日（1992.11.7.）に開催された。会場は同年夏にオープンして間もない、真新しい横浜ラポール（横浜市総合リハビリテーションセンターに隣接）のホールであった。会の運営は横浜市総合リハビリテーションの職員の方々の協力で実に円滑に行われた。

本研究会の最大の特色は先に述べたような学際的メンバー構成であることだが、その中でも出色なのは動物実験、心理実験、調査研究、臨床精神病理、神経生理学、臨床心理、小児神経学、発達臨床など、実に広汎な領域から多彩な研究報告がなされていることである。

さらには毎年乳幼児研究では著名な研究者を2人招いて特別講演が開催されるという欲張りようである。今回は放送大学三宅和夫氏による「乳幼児の発達における情動の役割——日米比較の視点から——」、Prof. J.A. Corbett (Department of Developmental Psychiatry, University of Birmingham) による「発達障害における早期診断と早期介入」と題する講演が行われた。

一般演題発表では、会員の構成が学際的であることから、討論や質疑では用語をめぐる問題点や研究方法上の疑問などの指摘がなされ、研究発表の質もさまざまであった。これも黎明期ゆえの必然的な結果であろうか。

会の雰囲気は全体的に和やかなものであった。

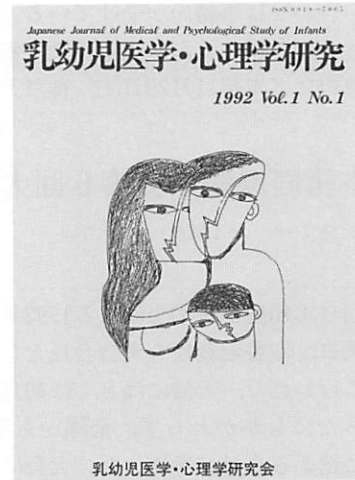


図1

まだお互いに相手を知ることエネルギーを費やしている様子で、さほど質疑は活発ではなかった。いくつか研究方法上の問題点を厳しく指摘した発言があったことはあったが……。このような学際的な研究会の今後の発展は、相互に忌憚らない活発な質疑があつてはじめて可能になるものである。会員のより自発的な参加が問われているといえよう。

乳幼児研究の中で明らかになってきた新生児の能力の豊かさをみると、いまだ設立間もない新生児のような本研究会も無限の可能性を秘めており、今後の研究成果が待ち望まれる領域として大いに発展が期待されているとあってよい。

その具体的な成果として昨年11月末には早速、研究会誌「乳幼児医学・心理学研究」創刊号（図1）が発刊された。石井高明氏（石井クリニック）のデザインによる親子像が象徴的に描かれ、ピンクの色調が鮮やかな表紙は、まさに本研究会の初々しさを端的に示しているようで眩しいほどであった。創刊号の内容は第1回本研究会の発表演題の中で投稿された論文と特別講演（名古屋大学教育学部小嶋秀夫氏と東海大学医学部精神科山崎晃資氏）で主に構成されている。

ちなみに本研究会の世話人代表は栗田広氏（東京大学医学部精神衛生学教室）、事務局代表は本城秀次氏（名古屋大学教育学部教育心理学教室）である。本研究会ならびに研究会誌に関

する問い合わせは事務局が受けている。

今回は今回と同じくわが国を代表する港町である神戸市にて本年11月20日(土), 神戸大学医学

部精神科白瀧貞昭会長のもと開催される予定である。

## 日本箱庭療法学会第6回大会

■1992.11.7-8. 於千葉市・千葉大学

大場 登 (大場分析プラクシス・上野学園大学短期大学部)

第6回日本箱庭療法学会は去る1992年11月7、8日の両日、安香宏教授を大会会長として千葉大学にて行われた。天候にはとくに初日は恵まれなかったにもかかわらず、全国から500名をはるかに越える会員が参加した。大会はIワークショップ、IIシンポジウム、III研究発表、の三部から構成され、それぞれ興味深いディスカッションが繰りひろげられた。報告者自身、ワークショップの講師や研究発表の指定討論者として直接的参加をしてしまったものが多く、本稿もその意味で多分に主観的印象の感を免れないことをあらかじめお断わりしておきたい。

第I部のワークショップは、「箱庭療法の本質」「箱庭の象徴性」「箱庭と描画」「箱庭と境界例」「箱庭と夢」「箱庭とコラージュ」「箱庭と老人」「箱庭と中高年女性」「箱庭と幼児」の9コースが設けられ、それぞれ主として参加者から提供されたケースを中心に検討が加えられた。1ケースに3時間をかけて丹念に検討された上に、大会準備委員会からの要請で各テーマに関するミニ・レクチャーもが講じられたので、例年のワークショップに増してひとつのまとまりのある会になったところが多かったと思われる。

第II部シンポジウムは、「祈り・つぶやき・叫び——箱庭における宗教性と音の意味世界」という荘重なタイトルのもとに行われた。亀井敏彦氏が100枚を越すスライド紹介を行った上で、山折哲雄氏、河合隼雄氏、そしてL.A. から招かれた幸子・タキ・リース氏の3氏がそれぞれの立場からコメントを展開された。山折氏は親鸞と良寛に言及しながら、越後に流されていた親鸞の心に深い影響を与えた「海」が箱庭に表現されやすい一方で、同じ越後の国上山五合庵

にひっそりと暮らした良寛の歌に頻出する「雪」は箱庭に表現されにくいのではないかと示唆された。リース氏は沖縄でのフィールドワークからにらかないの神々と島の人々とのかわりについて報告された。ところで亀井氏は、ひとつのケースをじっくりと呈示していくという本学会従来の手法を取らず、氏がこれまで18年に及ぶ箱庭臨床の中からとくに今回のテーマとの関連で印象に強く残るものを次々に示していかれた。それぞれの箱庭はたしかに強力なインパクトを持つものであるが、背景となるそれぞれの脈絡が不明なまま次から次に呈示されるので、参加者がこれを自らの心におさめるにはいささかの困難が覚えられたようであった。この辺りを河合氏は、「叫び」はその声の大ききゆえに、逆に人々の心におさめられにくいのではないかと指摘されていた。ここら辺からシンポジウムは、むしろ宗教という表のテーマから、箱庭と治療者、治療者の適性、訓練といったテーマへとアクセントを移動した。亀井氏がシンポジウム論文と多数のスライドを通して、良きにつけ悪きにつけ亀井氏の治療者としての裸の姿、ある意味で亀井氏の主観的世界そのものを提示したのに対して、アメリカで分析家として開業するリース氏は、訓練におけるペルソナの獲得の重要性、他者に伝える客観性をもった言葉の重要性を強調した。これに対し河合氏は、西洋では訓練が組織的・徹底的に行われるが、その蔭で犠牲になったクライアントたちもまた多いことを指摘し、箱庭療法の訓練が一筋縄ではいかないことを強調された。報告者は、亀井氏のようないわば箱庭名人(ボン・サンドレイ・セラピスト)とでも言うべき人を別にすると、やはり多くの人にとっては基本的には長